

結婚する女

作 富田求

(決定稿)

『登場人物』

宮下美知子(65)

河合秀夫(32)

池谷健二郎(53) 刑事

小泉明(39) 刑事

宮下ゆかり(45)

大山洋子(48)

柳沢章一(46)

柳沢治(79)

○美知子の部屋

机の前に宮下美知子（65）が座っている。好青年の河合秀夫（32）が机に手を付いて、深々と頭を下げる。

秀夫「美知子さん、申し訳ありません」

美知子「あんたのせいで、破産だよ！何千万溶かしたら気が済むんだい。こっちは、体を張って稼いだお金が一瞬で消えるんだ。涙も出ないよ」

秀夫「まさかこんなに円安に振れるなんて、想像もしておりませんでした。またご迷惑をお掛けして、本当にごめんなさい」
秀夫が土下座する。

秀夫「許してください！」

美知子「土下座なんか止めとくれ。あたしや土下座する奴は、大嫌いなんだ。今まで土下座した奴に、碌な奴はいなかったよ」

秀夫が土下座しながら、床を叩いている。

秀夫「ごめんなさい…ごめんなさい…許して下さい」

美知子「さっさと顔あげとくれ」

秀夫が顔を上げると、涙ぐんでいる。

美知子「秀ちゃん、あんた泣いているのかい」

秀夫「（涙を拭きながら）情けない…恩ある美知子さんに、ご迷惑をお掛けした自分が情けなくって…」

美知子「（苦笑いして）男が泣くのは、親の死に目に会えなかった時だけだよ」

秀夫「美知子さんに申し訳なくて…本当にごめんなさい」

美知子「わたしや女の涙は、絶体信用しないけど、秀ちゃんの涙に免じて、今日のところは許してあげるよ」

秀夫「ありがとうございます」

秀夫が割りと元気よく立ち上がる。

秀夫「先物で損を出したから、今度こそ大儲けして頂こうと、FXをおすすめしたのですが」

美知子「銀行員だったから、株は分かるつもりだったけど、外国為替なんて、荷が重かったんだよ」

秀夫「円安に振れた時、手仕舞った方が良いと何度もご連絡したのですが」

美知子「私にも手が離せない仕事があるんだよ」

秀夫「今も深刻ですが、ここで損切りしなければ、もっと大変なことに・・・」

美知子「分かったよ。いくら出せばいいんだい」

秀夫「証拠金維持率を下回ったので、追証（おいしょう）として2500万出して頂けますか」

美知子「溜息をついて」2500万ねえ」

美知子、机の下から無造作に紙袋を取り出し、札束を出す。
鮮やかに札を数える。

秀夫「（調子よく）いつ見ても鮮やかな手さばきですね」

美知子「おだてても舌もでないよ。あたしには、もうこれしか残ってないんだから」

秀夫「本当に申し訳ありません。（深々と頭を下げて）自分が仕事を続けられるのは、美知子さんのお蔭です。上司に虐められ、辞めようと思っていた時に、助けて頂いた御恩は一生忘れません」

美知子「あたしやあなたと知り合って、大損だよ」

美知子、数え終わって札をまとめる。

美知子「はい、これ2000万あるよ」

秀夫「あの・・2500万いるんですが」

美知子「500万ぐらいまからないのかね」

秀夫「あと、500万ないと大変なことに」

美知子「あんたが、絶対確実だというから買ったんだよ」

秀夫「金融の世界に、絶対はないと・・・」

美知子「フン、自己責任と言うんだろ・・（ため息）500万は、明日まで待っておくれ。当てがあるから」

秀夫「分かりました。それでは、この2000万円をお預かりして急いで会社に戻ります。それでは」

秀夫、お金を鞆に入れて帰りかける。

美知子「ちょっと、待って」

秀夫「え！何か（警戒している）」

美知子「取って置きのワインがあるんだよ」

美知子机の下から箱を取り出し、ワインを見せる。

秀夫「ひえ！ロ、ロマネコンティじゃないですか！本物を初めて見ました」

美知子「あんたにあげるよ。持ってお帰り」

秀夫「と、とんでもないです！ご迷惑をお掛けしたのに、こんな高価なワイン頂く訳に行きません（好青年ぽく）」

美知子「遠慮することないよ。私には、身寄りがないから、あんたがまるで息子の様に可愛いんだよ。死んだ一人息子に似ているんだよ」

秀夫「・・・息子さんを亡くされたのですか」

美知子「私が殺したようなもんさ。だから、あんたに貰って欲しいんだよ」

秀夫「（その言葉を噛みしめるように沈黙し）それでは、遠慮なく頂きます。ありがとうございます」

秀夫、鞆とワインの箱を持ち、深々と頭を下げる。

秀夫「これで失礼します。明日、500万よろしくお願いします」
秀夫帰る。

美知子、秀夫が帰るのを見届けてから、紙袋の中から黒革の手帳を取り出す。

美知子「私の黒革の手帳さん」

手元の手帳を鮮やかにパラパラとめくる。

美知子「林・・・公造・・・と、連絡は三か月前か・・・」

美知子確認して、携帯を掛ける。

美知子「公ちゃん、元気。ごめんね、三か月も連絡できなくて。母が危篤だったから・・・そう公ちゃんと同い年の89歳。：うん、今日亡くなったの。あっけなかったわ。（あざとく、鼻をすする）だから葬式代があるの。頼めるの公ちゃんしかいないのよ。・・・うん、500万。最後ぐらい親孝行したいじゃないの。・・・ううん、公ちゃんはまだ10年は大丈夫だから、その自分の葬式代を貸してよ。今からあなたの家に行くわ。・・・ううん、婚姻届け持って行くわ。本当にお待

たせしたわ。私は古いタイプだから、恥ずかしいことは、言えないの。でも今日は、はつきり言うわ。愛している。これからもずっと永遠の愛を誓うわ。もう顔が真っ赤よ。でも公ちゃんだから言えたのよ。ダメ、誰にも言わないで・・・お願い、ダーリンと二人だけの秘密を作りたいの。そう秘密の結婚記念・・・」

部屋が徐々に暗くなり、暗闇に。

○警察署の一室

池谷刑事「2000万!」

宮下ゆかり「結婚詐欺なんです!」

小泉刑事「結婚詐欺? 実際に結婚したんでしょ」

ゆかり「あの女は、結婚する結婚詐欺師なんです」

池谷「結婚する結婚詐欺師ねえ。それで警察に、何を調べろと言うんですか」

ゆかり「知り合って、すごいやらしいベッドなんか持ち込んで、住民票も移して、通い始めたんですよ。最初は一人暮らしの父の面倒を見てくれれば良いと思ったんですが、すぐ籍を入れると言いついて」

池谷「お父さんはどうだったんですか」

ゆかり「父は85歳ですよ。もうボケていたんです。でも昔から言い出したら聞かなくて・・・いくら財産狙いだと反対してもダメでした」

小泉「最近多いんですわ。お宅のようなケース」

ゆかり「それで、籍を入れてわずか一か月ですよ。父が亡くなったのは」

池谷「85歳の高齢なら、おかしくないんじゃないですか」

ゆかり「あれだけ元気だったのに、風邪で入院して、急性肺炎であっけなく死にました。入院してたった一日ですよ」

池谷「一日ねえ」

ゆかり「お見舞いにも行けなかった。父の死に目にも会えなかったんです」

小泉「まあ、同情はしますが・・・」

ゆかり「母は私を産んで直ぐ亡くなったので、父が男手一つで育ててくれたんです。中学の時は、毎日お弁当を作ってくれました」

小泉「優しいお父さんだったんですね」

ゆかり「ええ、頑固で、融通が利かなくて、会社でも人間関係で苦労したようですが、私には優しい父でした。不器用なくせに私のために料理教室にも通い、頑張ってくれたんです」

池谷「その優しいお父さんは、85歳の高齢でしょう。どうして同居されなかったんですか？そうすれば結婚なんて言い出さなかったでしょう」

ゆかり「夫は養子で、父とそりが合わなくって…それに息子が受験生なんです」

池谷「そうですか」

ゆかり「後悔しても始まりませんが、私だけでも同居していればよかった・・・」

池谷「・・・」

ゆかり「親孝行の真似事でもできたのにと思うと残念で・・・悔しくて・・・もつと私の手料理を食べさせたかった・・・」

ゆかりが泣く。

池谷と小泉が譲り合う。

池谷「お気持ちは分かりますが、警察に何ができますか」

ゆかり「あの女、まだ初七日の法要も終えてないのに、用意していた遺言状を持ち出して来て、遺産のすべてを相続すると言い出したのです」

池谷「遺言状ねえ」

ゆかり「父は85歳でボケていたのですよ」

池谷「それじゃ遺言状の有効性を、争えばいいじゃないですか」

ゆかり「(首を振り)その遺言状も」丁寧に公正証書遺言なのです」

池谷「うーん、公正証書遺言なら仕方ないですね」

小泉「あ、公正証書遺言って何ですか」

池谷「お前警官のくせに、公正証書遺言も知らないのか。公証役場で、作られる遺言なんだ。法的にひっくり返すことは不可能に近い」

小泉「そんなに効力があるんですか」

池谷「ああ、絶大だよ。有効性は問われず、亡くなつてすぐに相続できる」

ゆかり「結婚してわずか一か月で公正証書遺言状まで用意するなんて、計画的犯罪じゃありませんか」

池谷「怪しいとは思いますが、犯罪とまでは言い切れないですね」

ゆかり「弁護士を立て、民事調停して何とか2000万円と、父が大切に集めていたワインで折り合ったんです」

池谷「ワイン？」

小泉「ワインぐらいで済んで良かったじゃないですか」

ゆかり「（首を振って）全部で一千万円以上するんです」

小泉「一千万！ワインってそんなにするんですか？」

池谷「俺は、安いワインしか飲んだことないが、100万円以上するワインもある」

小泉「100万！自分はワインより100万円の方が」

池谷「お前のこと何か聞いていない！叩き売っても数百万にはなるな」

ゆかり「あの女、ワインが欲しくて調停に応じたんです。なんで

も、私の血は、ワインでできているとか言っていました」

池谷「チッ、女優じゃあるまいし、その女許せんな」

小泉「そんな奴、アル中になればいいんですよ」

ゆかり「あの女が父を殺したんです」

池谷「何か証拠でもあるのですか」

ゆかり「女の感です。あの女の目は、人殺しの目です」

池谷「女の感だけじゃ捜査できません」

ゆかり「調停の時、早く現金を手に入れようと焦っている気がしたんです。きっと、あの女の裏には何かあるはずです。何とか、あの女の身边を捜査して下さい。お願いします」

暗転。

○治のマンション

美知子と柳沢治（79歳）がワインを飲んでいる。

治「（グラスを持つ手が震えている）この一杯は、いくら位かな」

美知子「さあ、8万ぐらいじゃない」

治「もったいなくて飲めねえよ」

美知子「愛する治ちゃんのために、用意したんだから気持ちよく飲んでよ」

治「（拝むように飲み）有り難い。（飲んだグラスを見ながら）1万3500円分位飲んじやったよ」

美知子、グラスを優雅にくゆらせながら、ゆっくり味わって飲む。

美知子「（目を瞑って）深い味わいの奥に、かすかな枯草の香りがする・・・」

治「え、このワイン、傷んでいるのか？」

美知子「（グラスを見ながら）最高のワインよ。このワインがあれば、もう何もいらない・・・」

治「わしは、ステーキが食いたいが、美知子は肉も魚も食わないのか」

美知子「わたしは、肉も魚も食べない。だって可哀想じゃない」

治「美知子は優しいのう」

美知子「あたしは、ワインとチーズがあれば生きていけるわ」

治「そんなもんかのう」

治が何気なくワインを飲む。

治「あ、また一万円ちょっと飲んじまった。よく分からないけど美味かったよ。いい冥土の土産ができた」

美知子「何言っているの。治ちゃんには、長生きして欲しいのよ。」

愛しているから

治「お前は、可愛いな」

治、美知子を抱き寄せる。

美知子「治ちゃんが死ぬまで、面倒を見てあげる」

治「嬉しいね。子供は2人いるけど、家に寄り付きもしない。わしにとっては、美知子は宝だよ。こんな高級ワインも飲ませてくれるしな」

美知子「治ちゃん、愛しているわ」

美和子がキスをする。

治「わしもじゃよ。愛している、美知子」

キスをしようとする治を押さえる。

美知子「治ちゃん、今は元気だけど、もしもの時のことも考えてくれる」

治「わしやまだまだ死なん、でも男の責任として、きちんと美知子と結婚したい」

美知子「やっぱり治ちゃん素敵！男らしい。惚れ直したわ」

治「ウフフ、これからどうじゃ」

美知子「体だいじょうぶなの・・・」

治「この通り、体もあっちもビンビンじゃよ。この高級ワインのお蔭かな」

美知子「ウフツ、今夜は眠らせないわよ」

治「望むところじゃよ。何か若い時に戻った気分じゃよ。ヘイ！
ベイビー！レッツゴーじゃよ」

○警察署の一室

大山洋子（45）と弟柳沢章一（40）が池谷と小泉に相談している。

池谷「そうですね。事件にはなりませんね」

章一「高齢の父が急に結婚するって言い出したんですよ」

洋子「あの女は絶対詐欺師です」

章一「父の財産を狙っているんです」

洋子「狭い部屋に安っぽいベッドを持ち込んで、ほんといやらしい。父は79歳ですよ」

池谷「歳はねえ、今は高齢者同士の結婚は、珍しくない時代ですよ」

小泉「はやりと言ってもいいんじゃないですか」

池谷「もし、ご心配なら、あなたたちで説得するしかないんじゃないですか」

洋子「子供たちの言うこと聞かないんです。だからお願いに来て
いるんです。何とかして下さい！」

章一「あんな女、お義母さんなんて呼べないよ！」

池谷「まあ、一人暮らしの老人は、したたかな女に狙われたらイチコロですよ」

章一「え、本当ですか。姉ちゃんどうしよう」

洋子「困ったわ。父は、教育者で本当は用心深い人なんです。あんな女に騙されるなんて」

池谷「逆ですよ。教育者で用心深い人ほど、一旦気持ちが傾いたら、ズブズブですよ」

章一「（悲しげに）姉ちゃん、父さんはもうズブズブだよ」

洋子「ブスなんですよ。どうして父があんな女に・・・」

池谷「残念ですが、男は、女が言い寄ってきたら、断れない哀しい生き物なんです。それは美人とかブスとか関係ない。いや

むしろブスだからこそ、現実味を感じるんですよ」

洋子「どうしたらいいのかしら」

小泉「池さん、だから結婚詐欺師はブスが多いんですか？」

池谷「そうだ。小泉君、よく気づいたね。私の刑事人生の教訓その一」

小泉「はい」

小泉がメモ帳に書く準備をする。

池谷「女の詐欺師、特に金融詐欺師は、美人と考えて間違いない。

一方、結婚詐欺師はブスが多い。これは詐欺師を見分ける鉄則だ」

小泉「分かりました」

小泉が手帳にメモする。

池谷「教訓その二。美人は、落としやすい」

小泉「本当ですか？」

池谷「人間失うものが少ないほど、守りに強いものなんだ」

小泉「そうか！美人は失うものが多い」

池谷「そうだ。その中で一番壊れやすいものは、何だと思う」

小泉「美貌ですか」

池谷「違う。プライドだ」

小泉「プライドですか？」

池谷「そうだ。取調室で、じっと女の目を見るんだ」

洋子「あの・・・」

池谷「一言もしゃべらせずに、女の目を見続ける。自分は、世間話しながら、女には、弁明もさせない」

小泉「・・・」

池谷「二日でも三日でも見続ける。そしたら、女の瞳の奥でプライドが揺れる瞬間がある。その時を見逃さずズバツと心に切り込むんだ」

小泉「ズ、ズバツとですか」

池谷「ああ、そうすると、あとは俺の言いなりだよ」

章一「す、凄いテクニクですね。自分もメモしていいですか」

洋子「章一、あなた何しに来たのよ（たしなめる）」

章一「姉ちゃんには関係ない。美人の話だよ」

洋子「フン！」

池谷「これは実生活でも応用できる」

章一「ほ、本当ですか？」

池谷「(悠然と) ああ、実は、美人の方が落としやすい」

章一「(落胆して) ウウツ、俺は、高嶺の花だと思って、美人を避けていた。自分で自分の可能性を潰していたんだ！」

洋子「章一、人それぞれよ」

章一「姉ちゃんに、俺の悔しさなんか分かるもんか！くそ！」

小泉「(章一の肩に手をかけ) 俺には分かる。あんたの気持ちが。(二人見つめ合う) 俺たちは、間違った人生を送ってしまった・・・もう、取り返しがつかない(激しい落胆)」

章一「もう、取り返しがつかない」

池谷「(二人の激しい落胆に動揺して) き、君たち勘違いしたら駄目だよ。誰でも美人を落とせるわけじゃない。あくまで比較の問題なんだ。君たちの人生は、まだまだこれからじゃないか！」

小泉「(投げやりに) 分かっていますよ」

池谷「そして、前途ある君たちに捧げる最後の教訓は」

小泉・章一「はい」

池谷「(厳粛に) ブスの深情けは、幻想である」

小泉「(メモしながら) ふ、深いですね」

池谷「ああ、俺の経験だ。ブスの深情けを信じたら、人生を誤るよ。特にキャバクラなんざ最悪だ。(沸々と怒りが甦ってくる) あの夕子の奴、ブスなくせして俺を騙しやがって、くっそ！ブスの深情けを信じた俺がバカだった！」

池谷が机をドンと叩く。

池谷「今考えてもはらわたが煮えくりかえる！許せん！夕子！」

小泉「(メモしながら) どこまでメモればいいでしょうか」

池谷「(怒りを小泉に向けて) 馬鹿もん！俺の怒りを心に刻め！」

小泉「はい！」

洋子「あの、お怒りは分かりましたが、私たちは、どうしたらいいんでしょうか」

池谷「(怒りを鎮めて) し、失礼しました。要は、高齢者の恋愛でも、先に惚れた方が負けということですよ」

章一「負けですか・・・」

小泉「ある程度、覚悟をした方がいいですよ」

洋子「何を覚悟するんです」

池谷「まあ、まだ先の話でしょうけど、財産分与とかね」

章一「（意を決して）姉ちゃん、この際だからはっきり言っておくけど、父さんのマンションは、僕が相続するからね」

洋子「フン、冗談はあさつてにしておくれ。あのマンションは、あたしが娘と住むのよ」

章一「いや、長男の僕に、当然相続権がある」

洋子「ケッ、何が長男よ。未だに結婚できない甲斐性なしのくせに！」

章一「（むきになって）選ぶ相手を間違っただけだ！」

洋子「フン、偉そうに。何人に振られたら気が済むんだい」

章一「姉ちゃんが、人のことを言えるのか！」

洋子「！」

章一「そんなきつい性格だから、博さんは、女を作って出て行っ
たんじゃないか」

洋子が章一を殴る。

章一「な、何するんだ！」

章一が洋子につかみかかるが、簡単に弾き飛ばされる。

章一「クソッ、つ、強いだけが女じゃないぞ！」

洋子「あんな浮気男、こっちから叩きだしてやったんだ！」

章一「捨てられたくせに、偉そうに言うな！」

洋子「なに！章一！」

洋子が章一に殴りかかる。

章一「ヒエーツ」

池谷「姉弟喧嘩は他でやってくれ！」

小泉「あんたたち、そんなことやっていると、父親の財産を根こそぎ取られちゃうよ」

洋子「根こそぎ？」

小泉「公正証書遺言を作られたら、それこそ根こそぎだよ」

章一「何ですか、それ」

小泉「（馬鹿にして）あんたたち、公正証書遺言も知らないで、警察に相談に来ているのか。絶大な力がある遺言だ。ねえ池さん」

池谷「警察が怪しいと思っても、手の出しようがない」

洋子「お願いします！何とか助けてください」

小泉「警察は、民事不介入なんです」

池谷「今は、あなたたちで、お父さんを説得するしかないですよ」
章一「警察は、事件が起ってからしか動かないんですか」

洋子「間違いなく結婚詐欺なんです。あの女を捕まえてください」

池谷「結婚詐欺？本当に結婚すれば、どうやって結婚詐欺と証明するんですか」

洋子「・・・」

池谷「結婚する結婚詐欺師を一々捕まえていたら、拘置所は老人ホームになっちゃいますよ」

洋子「老人ホーム？」

池谷「ええ、それだけ本物と詐欺の区別は難しいということです」

章一「あの女、きつと今までもやっているとと思うんですが」

池谷「うん・・・(思いを巡らす)」

洋子「間違いありません」

小泉「警察は思惑で動けないんです」

洋子「そんな・・・」

暗転。

○治のマンション

美知子と治（79）がベッドの中にいる。

治「ベッドも良いもんだ」

美知子「そうでしょ。高かったんだから」

治「このクッションがたまらん」

治、ベッドの中で大きく体を動かす。

美知子「いつもヨボヨボ歩いているのに、ベッドの中じゃ元氣じゃない」

治「ベッドの中じゃ足は使わんからのう」

美知子「使う足もあるんじゃない」

治「さつきは、見栄を張ったけど、その足は、もう役立たん。不憫な息子じゃ」

美知子、手でまさぐる。

美知子「何が不憫な息子よ。硬くなってるじゃない」

治「俺のあそこは、もう死んでいる。死後硬直じゃよ」

美知子「死後硬直？だったら、清めて上げる」

美知子、布団の中にもぐり込む。

治「ひ、久しぶりの感覚じゃ。あ、あ、どんどん死体をいたぶっておくれ」

美知子、布団の中でモゾモゾ動く。

治「ああ、いい、うう、天国に行きそうじゃ」

美知子布団の中から急に顔を出す。

治「(不満げに) 天国に行きそうだったのに、何だ！」

美知子「治ちゃん、男ならきちんとケジメを付けてね」

治「分かった、分かった。頼む、もうすぐ昇天なんだ」

美知子「(顔を背けて、呟く) 早く、本当に昇天して欲しいわ」
美知子大きく息を吸い込む。

ピンポン、ピンポン。

美知子「誰か来たみたいよ」

治「ほっとけ、ほっとけ。さあ、さあ、続けておくれ」

ピンポン、ピンポン。

美知子「子供たちなら、合鍵持っているから入ってくるわよ」

ピンポン、ピンポン。

治「くそ！しつこいな」

治は、ガウンを羽織って起きてくる。

洋子と章一が鍵を開けて入ってくる。

章一「お父さん！」

洋子「部屋で倒れているんじゃないかと心配したわよ」

洋子と章一が、治のガウン姿を見る。

章一「お父さん！具合悪いの？」

治「この歳になると、疲れやすくて、横になっておった・・・」

洋子「大丈夫なの？」

治「もう大丈夫じゃ」

洋子「歳なんだから、無理しないでね。さあ、ベッドに行って、横になっていて」

洋子、治をベッドに連れて行こうとする。

治「だ、大丈夫と言っているじゃろ」

治、ベッドに行かない。

洋子「もう歳なんだから、行きましょう」

章一「ゆっくり休んでよ」

連れて行こうとする洋子と章一、頑なに拒絶する治。

治「いやだ！」

洋子「どうしたの！何を嫌がっているのよ！」

治「拒絶しながら」いやだ。ベッドはいやだ」

洋子「治の頑なさを見て」何！ベッドに何かあるの！」

治「ない！何もない！あるのは、ベッドだけじゃ」

章一「姉ちゃん、おかしいよ？」

洋子がベッドに行こうとする。それを阻止する治。

治「威厳を持って」ベッドは、神聖な場所じゃ。教育者として、子供に見せたくない」

洋子「治を自分に向けて」何が教育者よ！父さん、あたしの目を見て本当のこと言つて。ベッドに何を隠しているの」

治が洋子を見るが、目が泳いでいる。

治「何もない。あるのは、空気だけじゃ」

洋子「空気？じゃ見てくる」

洋子が治を振り切つて、ベッドに行こうとする。

治「やめてくれ！」

洋子を止めようとした治が、突き飛ばされる。

治「ヒーエツ」

スローモーションのように、ふらふらと玄関の方によろけ、座り込む。

治「痛い！（大げさに）」

章一「父さん！」

章一が治に駆け寄る。

章一「大丈夫？」

治「（痛そうに）膝を打ったから、立ち上がれん」

章一が、治を抱き起しながら、玄関を見る。

章一「姉ちゃん！姉ちゃん！女物の靴があるよ」

洋子「え！」

治が、素知らぬ顔で立ち上がる。

治「（とぼけて）以前お前が忘れた靴かな」

洋子「（強く）私が裸足で帰ったというの！」

章一が靴を持ってくる。

章一「これ、姉ちゃんの靴？」

洋子「そんな趣味の悪い靴、私のじゃないわ！」

治「（動揺して）いや、そ、それは、おまじないじゃよ」

章一「（靴を見ながら）おまじない？」

治「女除けのまじないじゃ。わしはモテるからな」

洋子「お父さん！あの女を連れ込んでいるの！」

首を激しく振って否定する治。

洋子「いい歳をして何してるいのよ！恥ずかしい！」

治「（激怒して）いい歳とは何だ！わしが妻を連れ込んで何が悪い！」

洋子「妻！妻だなんて。よく言うわね」

章一「姉ちゃん、やっぱり父さんは、ズブズブだよ」

治「わしは、美知子と再婚することにした。いいな」

洋子「いいわけないじゃない。お父さんは、79歳よ。何考えているのよ！」

治「お前たちは、ろくにわしの面倒もみない。わしは、美知子にこれからの世話をしてもらうことにした」

洋子「認めないわよ」

章一「僕も認めません」

治「お前たちに認めてもらわなくて結構じゃ」

洋子「あんな泥棒猫に引かかって。お父さんなんか最低よ。ボケナス！」

美知子「ボケナス」

美知子がガウンを羽織って颯爽と登場。

(華やかな登場の音楽)

美知子「私は泥棒猫で結構だわ。でもお父様にボケナスとは言い過ぎじゃない」

洋子「あんたやつぱり居たのね。昼間からいやらしい」

美知子「居たのねとは、ご挨拶ね。もうすぐここも私の家になるのよ。ねえ、ダーリン」

章一「ダ、ダーリンって、父さんのこと？」

治「そうじゃ、これから美知子はわしの妻じゃ。お前たちは、美知子のことをお母さんと呼びなさい」

治が美知子の肩を抱く。

洋子「ケツ、何がお母さんよ。私たちのお母さんは、去年亡くなったお母さんだけよ！」

章一「そうだよ！母さんが草葉の陰で泣いているよ」

治「うるさい！ここはわしの家だ、今までもろくに顔も出さなかったくせに、帰れ！もう帰れ！」

洋子「言われなくても帰ります」

章一「僕は、長男として、この結婚は認めませんからね」

美知子「結婚は当事者同士で決めるもの。どんな年寄でも恋していいのよ。ねえ、ダーリン」

治「ああ、わしは、こんな恋を夢見ていたのじゃ」

章一「恋・・・！姉ちゃん、父さんが恋だって」

洋子「何が恋よ！気持ちが悪い！池の鯉の方が、よっぽどマシよ」

章一「姉ちゃん・・・」

洋子「章一、帰るわよ」

洋子が章一を連れて、憤然と帰っていく。

治「さあ、邪魔者はいなくなった。これからは恋人たちの時間じや。(猫なで声で) みっちゃん、さっきの続きをやろうよ」

美知子「(少し考えて) ムードが壊れたわ。私帰る」

治「こんなこと言わないで、僕の子猫ちゃん」

美知子「フン、私は子猫じゃなくて、泥棒猫だって」

治「もうそんなこと言わせんよ」

美知子「だったら、さっさと籍を入れてよ。そしたら、毎日やってあげるわよ」

治「分かった。籍を入れる。結婚しよう。豪華な式を挙げて、新婚旅行は世界一周じゃ!」

美知子「派手なことはダメよ。治ちゃんと籍を入れるだけで十分。

新婚旅行も箱根で十分よ。私たちの未来のために、贅沢は敵よ」

治「美知子の言う通りじゃ。お前は本当にいい妻じゃよ。わしは、これからお前の言う通り生きていくよ。さあ、さっきの続きをやつてよ」

美知子「フフフッ分かったわよ。ダーリン」

治「さあ、極楽に出発じゃ!」

治と美知子が手をつないで、ベッドへ向かう。
舞台が暗くなる。

○警察署の一室

小泉「入籍!」

洋子「ええ、父は言い出したら聞かないのです。騙されていると言ったのですが」

池谷「確かに、入籍が早いですね」

章一「僕は少し様子見て、相続の話をすればいいんじゃないかと思っています。あの厳格な父の口から、恋なんて言葉を聞くと、何だか、ちよつと羨ましくて・・・まあ、父にも父の人生がありますから」

洋子「そんなのんきなこと言つて。だからあんたは一度も結婚できないのよ。これで父さんがコロツといたらどうするのよ」

章一「父さんは恋してるんだよ。まだ元気だよ」

洋子「母さんだって、あつという間に死んじゃったじゃないの。あの女に、びた一文渡したくない」

池谷「女の名前は、何というのですか」

洋子「宮下美知子です」

池谷「宮下!」

小泉「この前の相談者も宮下じゃなかったですか」

池谷「そうだ、宮下ゆかりさんだ」

洋子「関係があるのですか」

池谷「まだ分かりません。でも宮下さんの話では、結婚してたった一か月で、お父さんが亡くなったそうです」

洋子「え！一か月」

章一「ち、父も危ないということですか」

池谷「もし関連があるとしたら、入籍は、すでに危険水域です。十分用心なされた方が良いでしょう」

洋子「警察から父に警告して頂けませんか。私たちの言うことは聞かないんです」

小泉「今の段階で、警察から直接警告するというのは・・・」

章一「事件が起こってからでは、遅いじゃありませんか」

池谷「分かりました。宮下ゆかりさんに連絡を取りますので、早急に、弁護士を交えてご相談なさったらいかがでしょうか？」

洋子「是非お願いします」

洋子と章一が深く頭を下げる。

池谷「われわれも彼女の周辺を捜査してみます」

洋子「あの女の化けの皮をはがしてください」

章一「よろしくお願いします」

○治のマンション

ベッドの中に美知子と治。

美知子「やつぱり、妻となると気持ちが変わうわね。尽くすのにも、

気合が入っちゃうわ」

治「嬉しいね。この歳になって、こんな可愛い新妻を迎えるとは思ってもいなかったよ。もう思い残すことはない」

美知子「死んじやいやよ、治ちゃん。長生きしてね、わたし寂しいじゃない」

治「分かった。美知子に寂しい思いはさせられない。わたしも頑張っつて、長生きするぞ」

美知子「嬉しい！治ちゃん」

二人抱き合う。

ピンポーン、ピンポーン。

治「せっかく、いいムードだったのに、またあのうるさい子供たちか！」

ピンポーン、ピンポーン。

美知子「早く出なさいよ！また部屋に入ってくるわよ」

治「ガウンを着て、リビングに行く。」

美知子は寝室で派手な服を着る。

そこに洋子、章一、ゆかりの三人が入ってくる。

洋子「お父さん！またベッドの中だったの。いい歳をして恥ずかしい」

治「いい歳とは何じゃ。わしにも青春を謳歌する権利はある！」

洋子「青春！？色ボケしちゃったの」

治「色ボケ！？帰れ！お前たちは、二度とこの家の敷居を跨ぐな！」

章一「お父さん！今日は大事な話があつて来たんです」

治「もう美知子と入籍した。お前たちと話すことは何もない」

洋子「お父さんになくても、私たちにはあるのよ。お父さんの命に係わることなんだから」

治「命！？」

美知子「い・の・ち」

美知子、颯爽と登場。（華やかな登場の音楽）

美知子「命とは聞き捨てならない言葉ね」

ゆかり「お義母さん」

美知子「・・・？」

治「おかあさん・・・？」

ゆかり「お義母さん、お久しぶりです」

ゆかりが一步前に出て、丁寧な頭を下げる。

美知子「ええ・・・と、確かあんたは、ゆかりちゃん・・・ね。ええ・・・

と、三郎さんの娘さんね」

ゆかり「その節は、大変お世話になりました」

また丁寧な頭を下げる。

美知子「（上品そうに）お世話だなんて、当然のことをしたまでで

すわ。三郎さんは残念でしたけど・・・」

治「この人は誰じゃ。わしには、話が見えん」

章一「この方は、宮下ゆかりさん」

治「宮下・・・？」

章一「そう、美知子さんの前の旦那さんの娘さんです」

治「前の旦那の娘さん・・・その人がなぜここにいるんじや」

ゆかり「父は、一年ほど前に美知子さんと結婚して、一か月であつてなく亡くなりました」

治が、ゆかりと美知子を見る。

美知子「本当にあつてなかったわね」

ゆかり「結婚して、たった一か月ですよ。あれだけ元気だった父が・・・」

治「それはお気の毒じやが、それとわしがどう関係するんじや」

美知子「三郎さんは高齢だったからね。だから、私は、治ちゃんには余計長生きして欲しいのよ」

治「美知子・・・」

洋子「お父さん！この女の甘い言葉に騙されないで！」

章一「お父さん！現実を見てくれよ」

ゆかりが、美知子を指さす。

ゆかり「父は、この女に殺されたんです！」

治「え！本当か」

美知子「治ちゃん、それが事実なら、のん気にこんなところにいないわよ」

治「そりやそうだ。うん」

ゆかり「この女に、財産を取られた上に、父が大事に集めたワインまでもっていかれました」

章一「ワイン？」

ゆかり「ええ、全部で一千万円は下らないと自慢していました」

洋子・章一「一千万！」

美知子「(バカにして)フッフ、ワインの価値は、値段じゃないわ。飲む人によって決まるのよ」

ゆかり「あんた、もうあのワインを飲んだの」

美知子「結構なワインでしたよ。あなたのお父様は、センス無かつたけど、ワインは良い趣味だったわ。ねえ治ちゃん」

洋子「(父を見て) お父さん！飲んだの？」

治「(狼狽えて) ええと、あの、8万円、いや12万円分位かのう(美知子を見る)」

洋子「こんな女のワインを飲むなんて、情けない」

ゆかり「もとは、父のワインなんですけど」

章一「（興味津々で）お父さん、ワインの味はどうでした？」

治「ええと、枯草の味とか・・・」

章一「え！腐っていたの」

治「いや、でも味は、いまいちピンと来なかったな」

ゆかり「父が飲めなかった大切なワインなのに・・・」

治「わしは、ガツンと焼酎派じゃ」

章一「もったいない」

治「でも、一口一万三千五百円と念じて、飲んだから、有り難かったよ。まあ冥土の土産じゃ」

洋子「フン、立派なワインが泣いているわよ」

美知子「ワインなんて所詮きえものよ。パーツと飲めばいいのよ」

ゆかり「父の大事なワインを・・・」

美知子「（きつぱりと）あのワインは、私の物です。妻として相続したんです」

ゆかり「妻！たった一か月じゃない」

美知子「一か月でも妻は妻よ。それに相続問題は、もう決着したじゃない。あなたは今頃何を言いに来たの」

ゆかり「あんたが許せないの！」

美知子「偉そうなこと言うんじゃないよ！85歳の老人を一人娘のあんたが面倒みなきや誰が見るのよ！」

ゆかり「私にだって家庭があるのよ！息子の受験と夫の浮気が重なって、お父さんどころじゃなかったのよ」

治「それは大変だったのう」

ゆかり「ええ、でも父さん元氣だったから」

洋子「浮気する男って最低」

治「お前も苦労しているのか」

洋子「ほつといてよ！」

美知子「三郎さんは、一人娘のあんたに放って置かれて、寂しかったのよ。それを私が慰めてあげた。感謝されこそ、恨まれる覚えはないわ」

ゆかり「あれだけ元氣だった父が、風邪で入院したら、翌日に亡くなったの」

章一「翌日に！」

洋子「風邪で入院して、翌日に亡くなるなんておかしいわよ」

ゆかり「あまりに急なので、お見舞いにも行けなかった・・・死に目にも会えなかった・・・」

ゆかり、涙ぐむ。

章一「あんた、三郎さんに何をしたんだ！」

美知子「三郎さんは、85歳だから、何があってもおかしくないわ。寿命だったのよ」

ゆかり「よく言うわね！人殺し！」

美知子「もう赤の他人なんだから、とつとと帰ってよ！」

ゆかり「（洋子たちに）もう財産を取られてしまった私が言うのも何なのですが、何とかこの女の被害者を私の父までにしてほしいんです」

美知子「犯罪者扱いね！私の名誉はどうなるの。出るところに出ましよう」

ゆかり「望むところよ」

洋子「白黒はつきりさせましょう」

治「洋子、止めてくれ。美知子はわしの妻なんだ」

ゆかり「お義母さん、あんたもそろそろ年貢の納め時よ」

ゆかりがゆっくり美和子に近づく。

ゆかり「これが何かわかる」

ゆかりが報告書をバックから取り出し、美知子に突き付ける。

美知子「何だい、水戸黄門の印籠かい」

ゆかり「そうよ！あんたの悪事を暴く印籠よ」

美知子「悪事？よく言うよ。結婚することが、そんなに悪いことかね（うそぶく）」

治「わしらの結婚は、永遠の愛の証じゃ」

章一「永遠の愛？！姉ちゃん、永遠の愛だって」

洋子「父さん、なに寝ぼけたこと言ってるのよ」

ゆかり「あんたの結婚は、普通じゃない！」

美知子「普通じゃないって、どういうことなのよ」

ゆかり「これは、弁護士の記事よ。弁護士が、あんたの除籍簿をたどって、あんたが6回結婚したことを突き止めたのよ！」

章一「6回も！こんな女が6回も結婚するなんて、絶対許せない！」

治「そんなことはない！戸籍には記載されていなかった。わしはこの目でちゃんと確かめた」

ゆかり「入籍する前に、本籍地を移して、戸籍から結婚歴を消していたんです」

治「そんなことができるのか」

ゆかり「ええ、弁護士によると、結婚詐欺の常套手段だそうです」

治「結婚詐欺・・・」

洋子「やっぱり、あんたは結婚詐欺師よ！」

美知子「何回結婚しようと、あんたたちには関係ないわ」

治「美知子、そんなに結婚していたのか」

美知子「わたしやモテるからね。わかるでしょ治ちゃん」

ゆかり「それだけじゃない！報告書には続きがあるのよ。その結婚した6人は、すべて亡くなっているのよ」

章一「え！6人も」

治「・・・！」

美知子「（うそぶいて）ああ、わたしやとことん男運の悪い女よ。

「星の流れに」を口ずさむ」

治「切ないのう」

美知子「きつと、わたしって不幸な星のもとに生まれたのね」

洋子「あんたが、不幸な星なのよ！」

ゆかり「6人ともあんたが殺したのよ！」

章一「そうだ！あんたが殺したんだ」

美知子「どこに証拠があるのさ。三郎さんが殺された証拠を出しなさいよ！」

ゆかり「この報告書を、警察に提出したわ。あんたは逮捕される」

章一「もう逃げられないぞ。覚悟しろ！」

美知子「みんな高齢だったのよ。みんな幸せに死んでいったのよ」

洋子「よく言うわ！人殺し！警察があんたの化けの皮を剥ぐわよ」

治「洋子、もうそつとしておいてくれんか」

洋子「お父さん、私たちの気持ちもわかってよ！父さんを守りたいのよ」

ゆかり「この女に、騙されないで下さい！」

治「頼む、洋子。わしは、いま幸せなんじゃ」

洋子「馬鹿言わないで！殺されるかもしれないのよ」

治「美知子は、わしの最後の女なんじゃ・・・美知子に殺されたら、それこそわしは本望じゃ」

章一「本望・・・？」

美知子「何言ってるのさ！あんたまで殺人鬼みたいにならないでよ！不愉快だわ、帰る！」

美知子、すごい剣幕で帰る。

治「美知子！待ってくれ、わしを置いて行かないでくれ！」

治が美知子の後を追おうとするが、子供たちに止められる。

章一「お父さん！」

洋子「目を覚ましてよ！お父さん」

治泣きながら、崩れ落ちる。

治「美知子、美知子……！わしを見捨てないでくれ……」
暗転。

○美知子の部屋

頭を抱えている美知子。

そこに、そっと入ってくる秀夫。

秀夫「（優しく）美知子さん、どうしたのです」

美知子「仕事が入りまく行かないんだよ」

秀夫「それは、いけませんね。今日は、確実に儲かる商品を持ってくるのですが」

美知子「それどころじゃないよ。せっかく苦勞して、入籍したのに、訴訟でも起こされたら、大変なことになっちゃうよ」

秀夫「いつもの美知子さんらしくないですね。今日は、あなたの誕生日じゃありませんか」

美知子「あんたが覚えていてくれたのは、嬉しいけど、この歳になつたら、誕生日なんて忘れたいよ」

秀夫「（微笑みながら格好良く）66歳のお誕生日おめでとう！美知子さん」

秀夫、後ろに持っていた真っ赤なバラの花束を美知子に差し出す。

美知子「まあ、素敵だね。誕生日だけじゃなくて、私が赤いバラが好きなのも覚えていてくれたんだ」

秀夫「大好きな美知子さんのことなら何でも知りたいんです」

美知子「あんた、ババア殺しだね」

秀夫「ババアだなんて、美知子さんは、まだお若いし、お綺麗ですよ」

美知子「おだてたって、何も出ないよ」

秀夫「せっかく入籍したんだから、さっさと仕事すればいいじゃないですか」

美知子「簡単に言うね。だったらあんたがやっておくれよ」

秀夫「それは、私の仕事ではありません」

美知子「あんたは、いつも私に汚れ仕事を押し付けて、甘い汁だけ吸っているんじゃないか」

秀夫「私は、あなたの仕事のパートナーではありませんよ」

美知子「・・・」

秀夫「私の仕事は、あなたに金融商品を買ってもらって、サービスで金持ちの老人を紹介しているだけです」

美知子「そして、私の仕事は、その老人を殺して、財産を巻き上げることかい」

秀夫「あなたがどうやってお金を作られるか、私は関知しません」

美知子「割に合わないね」

秀夫「私がいつ分け前を要求しました？」

美知子「偉そうなこと言うんじゃないよ！私が稼いだ金は、みんなあなたが溶かしてしまっただじゃないか」

秀夫「ヨミが甘かったです。ドル高を読み切れませんでした。でも今回は、確実に儲かりますよ」

美知子「現実ね・・・だったら、あんたが元金を保証する？」

秀夫「それはできません。でもここまで円安になったら、そろそろ揺り戻しが来ます。そこを狙って最後の大勝負に出ませんか」

美知子「相変わらず調子のいい子だね」

秀夫「美知子さんに、最後の恩返しをしたいんです」

美知子「私も返して貰いたいのは山々なんですけど、手が思いつかないんだよ」

秀夫「いつもどうやっているんですか」

美知子「手口を聞いて良いのかい。仲間になっちゃうよ」

秀夫「(少し動揺して) 仲間？」

美知子「共犯ってことさ」

秀夫「だったら、聞きません！」

美知子「安心しな。どんなことがあってもあんたのことは言わないから」

秀夫「・・・」

美知子「意外と簡単なんだ。風邪でもひいて入院したら、静脈に

注射器で空気を入れれば一発さ」

秀夫「へえ！（調子よく）簡単なんですネ」

美知子「（得意げに）寝ている時に気管に」

秀夫「（興味津々）気管に……」

美知子「おっと、ここからは企業秘密さ」

秀夫「今回もその企業秘密で茶々と片付けて下さいよ」

美知子「そうはいかないよ。相手が元気でピンピンしている。それに、周りが警戒しているし、警察も動き始めたしね」

ピンポン、ピンポン。

二人が目を合わす。

美知子玄関に行く。

美知子「あら、治ちゃんいらっしやい」

治「（真剣に）頼みがあつて来たのじゃ」

治が部屋に入つて来て、秀夫を見る。

美知子「どうぞ」

治「……」

一瞬気まずい雰囲気。

治「お客さんじやったのか」

美知子「ええ、まあ」

秀夫「（明るく）息子の秀夫です」

治「え！息子？（美知子に）息子がおったんか」

美知子「ええ、まあ、もう大きくなったから言わなくてもいいと思つて」

治「（秀夫に）初めまして。柳沢です」

秀夫「ああ、あなたが柳沢さんですか。母が大変お世話になつております」

秀夫が頭を下げる。

治「いや、こちらこそお世話になつております」

治も頭を下げる。

秀夫「柳沢さん、いやお義父さんと言った方がいいのかな」

治が突然土下座する。

治「申し訳ない。大切なお願いがあつて来たのじゃ」

美知子「治ちゃん、どうしたの。さあ立ってよ」

治「手で制して」わしは、美知子を愛しておる。もう美知子を手放したくない」

美知子が治を氣遣つて、しやがみ込む。

美知子「もちろん、私も治ちゃんのこと愛しているわ。ずっと一緒に居たい」

美知子が、秀夫を見る。

美知子「息子の前で、何恥ずかしいこと言わせるんだい」

治「わしも子供たちの前でそう言ったんだ。そうしたら、子供たちから条件が出たのじゃ」

美知子「条件？」

治「愛する美知子と一緒に生活する条件じゃ。まず、籍を抜くこと。そして、美知子が財産を要求しないと一筆かくことじゃ」

美知子「どうして！愛していたら、夫婦になるのは当然じゃないの！」

秀夫「僕もそう思います」

治「だから、こうして頼んでいるのじゃ。頼む、子供たちの言う通りにしてくれ。この通りじゃ」

治、頭を床にこすりつける。

美知子「結婚は、私たちのことじゃない。どうして子供たちの言うことを聞かなきゃならないのよ」

治「わしもそう言った。そしたら、親子の縁を切るとまで言うのじゃ。子供たちと会わなくてもいいのじゃが、孫が可愛い。可愛い孫に会えなくなるのが、苦しんじゃ」

美知子「冷たく」可愛い孫か、私か、どちらか選んでよ」

治「選ぶことは出来ん。頼む、愛があれば、財産なんかいらんじやろ。だから、子供たちの条件を飲んで、二人で暮らしていこう」

美知子「愛の問題じゃないわ。プライドの問題よ。治ちゃんが、あの子供たちの条件を飲むことに我慢ならないのよ」

治「美知子、頼む。二人で残りの人生を生きて行こう！時が経てば、子供たちの気持ちの変わるかもしれん」

美知子「私は、いやよ！」

秀夫「お義父さん、母にも考える時間を下さい。急なことなので、母も動揺しているのです」

治「すまん、甲斐性のない父親で。（美知子に）頼む。わしは、お前と一緒に居たいだけなんだ」

美知子「だったら」

秀夫「お母さん！（美知子を止める）お義父さん、今日はお引き取り下さい。直ぐに連絡します」

治「そうか・・・一緒に帰れると思ったのだが・・・」

治、とぼとぼと帰っていく。

美知子「何考えているのか、あの色ボケ爺が」

秀夫「仕事を急がなくてはなりませんね」

美知子「せっかくここまで来たけど、この仕事は無理かもしれない」

秀夫「（にこやかに）美知子さん、いいものがあるんです」

美知子「いいもの？」

秀夫「薬です」

美知子「薬はダメだよ。証拠が残ってしまう」

秀夫「証拠が残っても、証拠にならないのです」

美知子「証拠にならない？」

秀夫「この世に存在しない毒薬なんです」

美知子「バカじゃないのかい。存在しないものをどうやって使うのさ」

秀夫「言い方を変えれば、存在を消された『悪魔の薬』です」

美知子「悪魔の薬？面白いじゃない。聞かせておくれよ」

秀夫「実は、昨年祖父が亡くなったんですが、この人が戦争中に陸軍で秘密兵器の研究をしていたのです」

美知子「秘密兵器？スパイ映画みたいだね」

秀夫「そうなんです。スパイ用の兵器を開発していたんです」

美知子「本当かね」

秀夫「現実には有ったのです。『登戸研究所』と言うのですが」

美知子「登戸？何度か行ったことがあるよ。明大があるところだろう」

秀夫「そうです。今の明大の敷地の中にその研究所があったのです」

美知子「（興味津々で）どんな秘密兵器なんだい」

秀夫「おじいちゃんの話では、風船爆弾や生物兵器、偽札も作っていたそうです」

美知子「風船爆弾？子供のもちやみたいだね」

秀夫「実際、太平洋を横断して、アメリカ本土を攻撃したそうです」

美知子「へえ、知らなかったよ」

秀夫「研究所でおじいちゃんは、スパイ用の毒薬を開発していたそうです」

美知子「どんな毒薬なんだい」

秀夫「遅行性の毒薬です」

美知子「遅行性？」

秀夫「飲んでから、一、二時間ぐらいしてから効果が出る毒薬です」

美知子「面白い話だね。実際開発に成功したのかね」

秀夫「完成したそうです。ただ、敗戦後、アメリカ軍との取引で、その事実は一切公表されず、隠ぺいされました。だから、この世に存在しない毒薬なのです」

美知子「何て言う毒なんだい」

秀夫「青酸ニトリールと言うそうです」

美知子「青酸ニトリールねえ・・・本当に効くのかね？」

秀夫「効果は、人体実験で確かめたそうです」

美知子「人体実験！？毒薬を人間で試したのかい？」

秀夫「ええ、中国の南京で、ハルピンの731部隊の幹部と合流して実験したそうです」

美知子「731部隊？聞いたことあるよ」

秀夫「悪魔の飽食の731部隊です」

美知子「ああ」

秀夫「中国人の捕虜をマルタ（丸太）と呼んで実験したそうです」

美知子「マルタ？」

秀夫「材木みたいに一本、二本と呼ばれ、人間として扱わなかったそうです」

美知子「残酷だね」

秀夫「臓器のダメージを見るために、生きた人間を解剖したそうです。それから」

美知子「もう止めとくれ！そんな話聞きたくもないわ！残酷な話は苦手なのよ。人間のやることじゃない」

秀夫が、美知子の表情を探る。

秀夫「もつと怖いのは、自分たちが、その悪魔の実験をした人と同じ人間だということですよ」

美知子「わたしや信じられないね。本当にそんな残酷な人体実験があつたのかい」

秀夫「人体実験をした本人が、告白したんですよ」

美知子「もちろん、そんな残酷な実験をした人たちは、罪に問われただろ」

秀夫「いえ、戦後医学界などで活躍したそうです」

美知子「わたしやそっちの方が怖いよ」

秀夫「おじいちゃんは、死期が近づいていると悟った時、孫の僕にすべてを告白しようと決意したんです」

美知子「墓場まで持つて行かなかつたんだ」

秀夫「誰かに告白することで、少しでも楽になって、往きたかつたんじゃないですか。泣きながら告白していました」

美知子「少しは罪の意識を感じる人もいたんだ」

秀夫「おじいちゃんも、実験には抵抗があつたそうです」

美知子「そりやそうだろ。生きている人間を使うんだよ」

秀夫「でも、楽しくなつていったそうです」

美知子「え！・・・」

秀夫「実験を重ねるうち、自分の毒薬の効果を試すのが、段々楽しくなつていったそうです」

美知子「・・・」

秀夫「薬の量を変えたり、丸太の年齢・性別を変えたりしながら夢中になつてデータを取つたそうです」

美知子「・・・人間を殺すのがそんなに楽しいかね」

秀夫、美知子の表情を探る。

秀夫「泣きながら、後悔しながら、告白するおじいちゃんを見て、

羨ましくなつたんです」

美知子「羨ましい？」

秀夫「自分もやりたい。自分の目の前で、自分の開発した毒薬で、死んでいく人を見たいと思つたんです」

美知子「え！目の前で？あんた悪趣味だね」

秀夫「美知子さんに言われたくないですよ」

美知子「わたしや嫌な仕事をしているけど、人が死ぬところなんざあ見たくもないよ。見たら続けられないよ、こんな仕事」

秀夫「自分は、死に興味があるんです。だからおじいちゃんの遺品を整理しながら探しました」

美知子「・・・」

秀夫「そして見つけました。嚴重に包装され、保管されていたから間違いありません。これこそ『悪魔の薬』だと思います」

美知子「悪魔の薬ねえ」

秀夫「無味、無臭、無色で、遅効性、まさに理想的な毒薬です」
秀夫が鞆からアンプルを取り出す。

美知子「手に取って興味深げに見ながら」これが理想的な毒薬ね。
本当に効くのかしら」

秀夫「間違いありません。近所の猫で試しました。餌にほんの一滴垂らただけで、30分後に死にました」

美知子「え！猫を！（凄い剣幕で）酷い！あんたは、よく平気で猫を殺せるね！信じられないよ！あんな可愛い生き物を殺せるあんたが信じられない！」

秀夫「あなただって、平気で人を殺しているじゃないか」

美知子「人はいいのよ、罪深いから。でも猫に罪はないわよ！私に猫は殺せない。あんたは酷い！あんな可愛い生き物を」
美知子が秀夫を追い出そうとする。

美知子「出て行って！もう顔も見たくない！早く出ていけ！」

秀夫「そんな興奮しないで下さい」

秀夫が美知子を制して、美知子の手からアンプルを取る。

秀夫「（美知子にアンプルを見せながら）大事な切り札ですよ」

美知子「（興奮を鎮めて）そうだったね」

秀夫「これならどこにでも混入できます」

美知子「相手が用心深くても大丈夫だね」

秀夫「気付かないでしょう。薬を飲ませてから、死ぬまでにアリバイを作ればいいんですよ」

美知子「死体から青酸キニーネは検出されないのかい」

秀夫「たとえ検出されても出所は、分かりません。（アンプルを美知子に見せて）これは、世の中に存在しない毒薬なのです。

証拠にはなりませんよ」

美知子「うん、それはいけるね！」

秀夫がアンプルをケースにしまう。

秀夫「(美知子を見つめて) 美知子さん」

美知子「(頷いて) 分かっているよ。共犯者にしない」

美知子がケースを受け取る。

美知子「大事に使うよ」

舞台が暗くなる。

○警察署の一室

池谷「くっそ！あれだけ監視していたのに、あのババアにやられてしまった」

小泉「池さん、司法解剖の結果ができました」

池谷「どうだった？」

小泉「毒物らしきものが検出されたそうです」

池谷「毒物らしきもの？なんだそれは？」

小泉「特定出来ません。どうも青酸化合物らしいと言うだけで」

池谷「青酸？青酸なら即効性の毒物だろ」

小泉「だから余計分からないのです。柳沢さんが苦しみ出し亡くなった時、美知子は、この部屋で我々とおしゃべりしていたのですから」

池谷「ご丁寧に、父親のマンションに子供たちが集って、美知子との離婚の話を進めている時に亡くなったんだ」

小泉「かなりの遺産を手に入れましたね」

池谷「ババアの大胆不敵な犯行だ。許せん！警察をコケにしやがって。あのババアがやったのは分かっているのに、なぜ逮捕できないんだ！」

小泉「殺害方法、凶器が特定できないんです」

池谷「分っているよ！クソツ！特定できない毒物なんてあるのか」

小泉「よっぽど特殊な毒物なんでしょうね」

池谷「特殊な毒物ねえ・・・特殊な毒物・・・お前帝銀事件って知っているか？」

小泉「帝銀事件？」

池谷「ああ昭和23年椎名町の帝銀事件だ。12人が毒殺され、捕まったのは、画家の平沢貞道」

小泉「分ります。それがなにか？」

池谷「その帝銀事件で使われた毒薬も、特殊な毒薬なんだ」

小泉「特定されていないのですか？」

池谷「ああ、実は、戦争中に日本陸軍によって開発された特殊な毒薬と言われている」

小泉「日本陸軍？」

池谷「戦時中に生物兵器などを研究していた機関があったんだ。だから、当初は毒薬の線で、軍の関係者を追っていた」

小泉「・・・」

池谷「徹底した捜査で、かなり容疑者が絞り込まれた時、急に捜査方針が変更になった」

小泉「急に？」

池谷「ああ、犯行時に使われた名刺の線を追うことになったんだ。それで平沢が浮上した」

小泉「なぜですか？容疑者が絞り込まれたのに」

池谷「きつと絞り込んだ容疑者の中に、警察が逮捕できない奴が紛れ込んでいたのだ」

小泉「逮捕できない奴？そんな奴がいるのですか」

池谷「帝銀事件には、闇がある」

小泉「平沢は、身代わりですか」

池谷「そうだ。平沢は、拷問に近い取り調べで、一旦は自白したが、その後一貫して無罪を主張している」

小泉「裁判で、死刑が確定したんですよ。真犯人が別にいたなんて、信じられません」

池谷「死刑は執行されなかった。平沢は、95歳で獄死するまで刑務所では、アトリエを与えられるほど特別の待遇を受けていたんだ。なぜだ！」

小泉「・・・」

池谷「12人も毒殺した犯人だぞ」

小泉「確かに、おかしいです」

池谷「そして特殊な毒の真相は、闇の中だ」

小泉「その特殊な毒が、今回も使われたということですか」

池谷「それは分からない。現物がないからどんな毒かも分かっていない。開発されたという記録も残っていないんだ」

小泉「まさに、この世に存在しない毒薬なんですね」

池谷「日本の闇だ」

小泉「その日本の闇と、あの婆さんのつながりが見えませんか」

池谷「きつと、あの婆さん自体が闇なんだ・・・」

舞台が闇になる。

暗転。

○治のマンション

ソファに美知子と秀夫が座っている。
テーブルの上には、バラが飾ってある。
美知子が鮮やかな手付きで札を数えている。

秀夫「相変わらず鮮やかな手捌きですね」

美知子「年期が入っているからね」

美知子数え終わる。

美知子「定期預金が一千万、投資信託を解約して普通預金と合わせて五百万。全部で、一千五百万か。意外と現金は少ないね。まあ、このマンションも手に入っただし、ホッと一息だね」

秀夫「お見事な仕事ぶりですね」

美知子が紙袋にお金を入れる。

美知子「今回は、難儀したね。あんたの助けがなかったら、諦めていたよ」

秀夫「お役に立てて嬉しいです。それじゃ取りあえずこの千五百万をお預かりして、会社に戻ります」

美知子「ちよつと待つとくれ」

秀夫「え・・・」

美知子「今回は、あんたと私の共同作業だろ。まずは成功を祝して、乾杯しようよ」

秀夫「そうですね」

美知子「取って置きのワインを出すよ。こんな時に呑まないといつ飲むんだい」

秀夫「(嬉しそうに) 取って置きのワイン」

美知子、CDでシューベルトの『死と乙女』を掛け、キッチンに行く。

秀夫、マンションを見渡す。

秀夫「まあ、叩き売っても三千万にはなるな。早く売って現金を作らないと」

美知子がワインとグラスを持って来る。

美知子「このワインは特別だよ」
ワインを秀夫に渡す。

秀夫「わあ、シャトーブリオン、それも1947年の物だ。凄い！」
美知子「今日は、特別な日だからね。あなたと私の記念日」
秀夫「ありがとうございます」

美知子がテーブルにグラスを並べてソファに座る。
秀夫からワインを受け取り、秀夫の前のグラスに少し注ぎ、
テースティングさせる。
秀夫がワインの色や香りを入念に確かめて一口飲む。

秀夫「す、素晴らしい！まさに天使のワインですね」
美知子「この年のシャトーブリオンは、出来が良いからね」
美知子が秀夫のグラスに注ぎ、自分のグラスにも注ぐ。

美知子「バラとワインとシュールベルト、至福の時間だね」
美知子、グラスを回しながら、ワインの色を確認し、香りを
楽しんでいる。

美知子「芳醇でいて、香りの奥に微かに草原の風を感じるね。そ
れじゃ乾杯といくかね」
秀夫がグラスを掲げる。

秀夫「それでは、今回の仕事の大成功と、今後の美知子さんのご
活躍に乾杯！」
秀夫は、ワインを飲み恍惚の表情。

美知子「それには、乾杯できないね」
秀夫「機嫌よくワインを飲んで」どうしたんですか、美知子さん」
美知子「わたしやもうやらないよ」
秀夫「え・・・」

美知子「この仕事が最後だよ。もうやらない」
秀夫がグラスを置き、美知子を説得しようとする。

秀夫「そんなこと言わずに、やってくださいよ。金持ちの老人を

紹介しますし、何と言ってもあの薬を使う限り警察に捕まら
ないですから」

美知子「やらないと言ったら、やらない。わたしや堅実に老後を
生きていくことに決めたんだ」

秀夫「(動揺して) それは、困ります」

美知子「困ります？私が堅実に生きて、なんであんたが困るのよ」

秀夫「もう少し、仕事をしてください。お願いします(頭を下げ
る)」

美知子「いやだね」

秀夫「分かりました。しばらく時間を置きましょう。本日は、千
五百万だけお預かりして帰ります」

秀夫が金の入った紙袋を受け取ろうとする。

美知子「止めたんだ」

秀夫「え・・・」

美知子、グラスを置き、CDを止める。

美知子「もう、先物もFXも止めたんだよ」

秀夫「今回は、確実なんです。この儲けを倍にしましょう」

美知子「冗談はよしとくれ。あんたのせいで、どれだけ損してい
ると思っているんだい。わたしややつと目が覚めたんだよ」

秀夫「今まで、運が悪かったんです。今回は絶対ですから」

美知子「金融の世界に絶対はないと教えてくれたのは、あんたじ
やないか」

秀夫「ウツ・・・(詰まる)」

美知子「分かったら。あんたとの付き合いは、今日を限りだよ。

さあ、さっさと帰ってくれ」

秀夫、態度を急変させて凄む。

秀夫「おい、ババア！」

美知子「キヤーツ秀ちゃん、怖い！」

秀夫「殺しをばらされなくなかったら、俺の言う通りやれよ！」

美知子「(平然と) あら、大変。本性が出たわね」

秀夫「(やくざの様に凄んで) 痛い目にあいたいのか」

美知子「(わざとらしく) おお怖！大事な話の前に、大事なワイン
を片付けましょう」

美知子が、平然とワインとグラスを持ってキッチンへ行く。

秀夫「(苦々しく)とんだ計算違いだ」

美知子がキッチンから戻って来て、平然とソファに座る。

美知子「(とぼけて)何話していたかしら」

秀夫「俺をバカにしているのか」

美知子「とんでもない、今までの秀夫さんとえらく違うので驚いているのよ」

秀夫「てめえ、俺が警察に行くと確実に死刑だぞ。死刑が怖くないのか」

美知子「そら死刑は怖いわよ。でもね、もう歳だから」

秀夫「今まで何人殺したんだ」

美知子「治ちゃんでしょ。三郎さん、賢ちゃん・・・多すぎて分かんない(可愛く)」

秀夫「婆さん、もうボケてるのかい」

美知子「ボケちゃいないよ。全部この黒革の手帳に書いているからね」

秀夫「おっと、いい証拠だ」

秀夫が奪い取ろうとした時、美知子が手帳で秀夫の横つ面をパッシツ!と張る。

不意を食らって、吹っ飛ぶ秀夫。

秀夫「ワッ!」

美知子「チンピラのくせに、あたしに逆らうなんざ、百年早いよ!」

秀夫「くそ!」

美知子「あたしも反省だね。人を見る目には自信があったのに、あんたの本性は見抜けなかったよ」

秀夫「所詮同じ穴の貉だよ」

美知子「許せなかったんだよ」

秀夫「・・・」

美知子「あんたが薬の効果を見るために、猫を殺しただろ。それが許せなかった」

秀夫「たかが猫ぐらいで」

美知子「あんな可愛い動物を平気で殺す奴は信じられない。そう思って、あんたの会社に電話したんだ。そうしたら、あんた会社の金を使い込んで、とつくに辞めさせられていたんだね」

秀夫「あんたの仕事を見ると、まじめに働くのがバカらしくなっただんだ」

美知子「何だい、私のせいで道を踏み外したみたいと言わないでよ」

秀夫「みんなお前のせいだ!」

美知子「今まで可愛がってきたのに、恩を仇で返す気だね」

秀夫「俺は、始めから恩だと思ってるねえ」

美知子「今までの私のお金を返しておくれよ」

秀夫「フン、そんなもんとつくに使っちゃったよ。それに、てめえの金じゃないだろ」

美知子「私が体を張って手に入れた大切なお金よ」

秀夫「だったら、また体を張って、金持ちの老人を誑し込めよ」

美知子「わたしや鵜飼いの鵜かい。ごめんだね」

秀夫「こっちは、てめえの弱みを握っているんだ。もう逃げられない。死ぬまで働けよ」

美知子「そうしてあげたい気もするけど、残念ながら、あんたの方が先だよ」

秀夫「何だと!」

美知子「最高のワインだったろう。それがあんたにとって、最後のワインになるんだよ」

秀夫「え!」

美知子「そう、さ・い・ご・の・ワイン」

秀夫「て、てめえ、ワインに毒入れやがったな」

秀夫、吐き出そうともがく。

美知子「もう遅いよ」

秀夫「クーツ（胸を掻き毟る）」

美知子「散々あんたに食い物にされて来たけど、最後の最後は、

私が一枚上手だったね」

秀夫「クソッ!このババア」

秀夫が美知子に飛び掛かろうとするが、美知子は軽く秀夫をかわす。

もがきながら、美知子を捕まえようとするが、美知子は軽やかにかわしていく。

美知子「（小馬鹿にして）こっちは、修羅場を山ほど経験しているんだ。あんたみたいなチンピラに、捕まるもんかい!」

秀夫「クソッ！クソッ！」

秀夫が美知子を捕まえようとするが、軽くないなされる。

美知子「悪あがきはお止め！もうあんたに残された時間は僅かだよ」

秀夫「ワーーッ（絶叫）」

秀夫、毒を吐き出そうとするように、胸をかきむしる。

美知子「証拠は隠して、アリバイ作りに行ってくるよ」

美知子、苦しんでいる秀夫を見る。

美知子「私の可愛い秀ちゃん、さ・よ・う・な・ら」

秀夫「（苦しみながら美知子を見て）全部、全部お前が悪い！」

美知子「よく言うよ。自業自得だろ」

秀夫「全部お前のせいだろ！」

美知子「それじゃ秀ちゃん、グッドラック」

秀夫に手で別れの仕草をし、軽やかに部屋を出ていく美知子。

秀夫「全部、お前のせいだろ（絶叫）」

部屋に残された秀夫。

スポットライトの中でもがいている秀夫。

暗転。

○治のマンション

朝日を浴びながら、美知子が鮮やかに金を数えている。

シューベルトが流れている。

美知子「これで、二百万、合わせて七百万か。やっぱり、お金を

数えている時が一番落ち着くよ」

テーブルの札束を揃える。

美知子「今考えると、秀ちゃん存在は大きかったね。あの子に

見られながら、お金を数えていると、何か生きているって、

実感があつたね。ちよつと可哀想なことをしちやったかね」

ピンポン、ピンポン。

美知子「こんな朝早く誰だろう」

美知子、玄関に行く。

美知子「何だ、あんたたちか」

池谷「何だとは、ご挨拶だな」

美知子「わたしや警察に用はないよ。とつと帰ってくれ」

小泉「あんたに用がなくても、こっちにあるんだ」

池谷「どうしてもあんたの作り笑顔を拝みたくて、わざわざ朝っぱらからで出向いて来たんだ。お茶でも飲ませて下さいよ」

美知子「仕方ないね」

池谷、小泉が部屋に入って来て、テーブルの大金を見る。

池谷「おッ」

美知子「警官の安月給では、なかなか拝めないよ」

美知子が、お札を集めて無造作に紙袋に入れる。

池谷「生活するのがやっとだよ。こいつなんか結婚も出来ない」

小泉「共働きでないと、生活できません」

美知子「情けない話だね。私なんか毎朝札束を数えているよ」

小泉「毎朝？」

美知子「趣味、いや健康法かな」

池谷「健康法？」

美知子「お札を数えていると、すつとするんだよ」

池谷「うらやましい健康法だな。俺なんか、札入れの中を見る度にゾッとするよ」

美知子「可哀想だね。ちよつと分けて上げようか」

池谷「(美知子の言葉を無視して)座っていいか」

美知子「どうぞ」

池谷と小泉がソファに座る。

美知子「お茶が良いかい。コーヒーでも入れようか」

池谷「お茶で結構」

小泉「お気遣いなく」

美知子「気遣いなんかしないよ。お茶飲んだらとつと帰つとくれ」

美知子、紙袋を持ってキッチンに行く。

池谷「(美知子の後ろ姿に) そんな邪見にするなよ。俺たちは、あんたのアリバイを証明したんだぜ」

美知子「(振り返らず) よく言うよ」

池谷、小泉周りを見渡す。

小泉「いいマンションですね」

池谷「あのババアが手に入れた遺産だよ」

小泉「ここで、二人も死んでいるのに、よく平気で暮らせますよね」

池谷「そんなこと気にする奴は、平気で人を殺したりしないよ」

小泉「大金を持っていましたね」

池谷「あれも爺さんの遺産だ」

小泉「子供さんが相談に来られたのに、未然に防げず残念です」

池谷「俺達をコケにしがたって。今日こそ、ギャフンと言わせてやる」

美知子、何か口ずさみながらお茶を持って来る。

美知子「・・・ギャフン・・・ギャフン・・・」

池谷「何だ」

美知子「(池谷の顔の前で) ギャフン、これで気が済んだかい」

池谷「バカにしがたって」

美知子、お茶を配る。

池谷と小泉が、お茶を飲む。

池谷「ウォーッ！このお茶美味しいな。お前も飲んでみる」

小泉「池さん！本当だ」

美知子「玉露だよ。警察のお茶と物が違う。わたしや安いお茶は飲まないんだよ」

池谷「署じゃ、喜んで飲んでいたじゃないか」

美知子「フン、我慢して飲んだんだよ。あんな不味くて、しかも薄いお茶だったら、白湯の方がまだだよ」

池谷「自分からおしやべりに来たくせに、よく言うよ」

小泉「あんたは、何でおしやべりに来たんだ」

美知子「おしやべりは犯罪かい。あんたたちと話したくなかったから行ったんだよ」

小泉「二回来て、二回とも人が殺されているんだぞ」

美知子「そんなこと私の知ったことじゃないね」

池谷「殺された二人とも、あんたと親密だった。おかしいじゃないか」

小泉「しかもこの部屋で殺されているんだ」

美知子「(嘯いて) 偶然が重なることもあるんじゃない」

小泉がテーブルをドンと叩く。

小泉「(恫喝) おい、いい加減にしろ!」

美知子「あたしに、そんな脅しが通用すると思っているのかい。

あんたトウシロだね」

小泉「何を!」

池谷が、余裕を持って気色ばむ小泉を抑える。

池谷「(優しく) 婆さん、全部吐いちゃえ。そして楽になれよ」

美知子「フン、二日酔いじゃあるまいし、吐くモンなんかないよ」

池谷「(優しく) 婆さん、黙って、俺の目を見ろ」

小泉「池谷さん、例の奴ですね」

池谷が余裕の頷き。

美知子がじっと池谷の目を見る。

美知子「(池谷の目を見つめて) あら! 大変」

池谷「ど、どうした」

美知子「あんた、黄疸が出ているよ。肝臓大丈夫かね」

小泉「池さん!」

美知子の言葉に、池谷が一瞬ひるむ。

池谷「(凄んで) お前は、黙って、俺の目を見ていりゃいいんだ!」

美知子「はい、はい」

美知子が池谷の目を見つめる。

沈黙。

美知子の表情が変わり始める。池谷は変わらない。

美知子の表情の変化が、急に大きくなる。

不覚にも池谷が、それを見てプツと吹いてしまう。

美知子「フン、あたしの勝ちだね」

池谷「何!」

美知子「あら、にらめっこじゃなかったのかい」

池谷「き、貴様! お、俺を馬鹿にしているのか!」

池谷が飛びかかろうとするのを、小泉が必死に抑える。

小泉「い、池さん、落ち着いて下さい」

池谷「(興奮を鎮めて) す、すまん・・・」

美知子「あんたたち、ここは、取調室じゃないんだよ」

池谷「(気を取り直し) あんた何人殺しているんだ」

美知子「人聞きの悪い事言わないでよ！証拠を出しなさいよ、証拠を！」

小泉「あんたしかいないんだよ」

美知子「寝ぼけるんじゃないよ！二人が死んだ時、あたしやあんたたちとおしゃべりしていたじゃないか」

池谷「そうだ。完全なアリバイが成立している。あんたの勝ちだ。でも」

美知子「でも？」

池谷「でも神様は、それを許さなかった」

小泉「決定的な証拠が、出て来たんだ」

美知子「何カマ掛けているんだい。そんなのに引っ掛かる私じゃないよ」

池谷「あんた、刑務所に4年入っていたよな」

美知子「だから、犯人だというのかい。偏見だね」

池谷「その時、最初の亭主と離婚したよな。その亭主どうした」

美知子「知らないわ。生きているかも死んでいるかも」

池谷「その亭主は、あんたと離婚して、すぐ死んじゃった」

美知子「亭主も私が殺したというの」

池谷「いや、さすがに刑務所の中から殺すわけにはいかない。また殺しても、あんたに何一つ得することはない」

美知子「私の過去なんて、関係ないでしょ」

池谷「ないことはない。あんたは、自分の過去に復讐されたんだ」

美知子「過去に復讐？」

池谷「話を戻そう。この事件の一番の謎はあんたのアリバイだ」
美知子「(得意げに) 完璧よね」

池谷「そう、二人の体から検出された青酸は、即効性の薬物だから、カプセルにでも入れない限り、アリバイは成立する」

美知子「あの用心深い治ちゃんが、カプセルなんか飲むわけがない」

池谷「そこで我々は行き詰った。あんたが犯人だと分かっている

がら、証拠がなかったんだ」

美知子「だったら、さっさとお引き取り下さい。私は、おれでも数えて、気分転換したいのよ」

池谷「ところが、出て来たんだよ。決定的な証拠が」

小泉「あんたのアリバイを崩す証拠だ」

美知子「そんなのあるわけがない」

池谷が手紙を手にして、美知子に見せる。

池谷「これはコピーだが・・・河合秀夫の遺書だ！」

美知子「秀ちゃんの遺書！」

池谷「そうだ、遺書と言うよりダイイングメッセージだな。可哀想に、死の恐怖と戦いながら、震える手で書いたんだ」

美知子「秀ちゃん、最後は頑張ったんだ」

池谷「そう、あんたの罪を告発するために、必死で書いたんだ。

あんたが発見した時、気づかなかっただろうが、手の中に固く握られていたんだ」

美知子「秀ちゃん、最後は頑張ったんだ」

池谷「そう、あんたの罪を告発するために、必死で書いたんだ」

美知子「ふーん、その手があったね」

池谷「『青酸ニトリール』という暗殺用の毒薬を使ったんだな」

小泉「飲ませてから1、2時間で死亡する毒だ」

池谷「これで、あんたのアリバイは崩れた」

美知子「フン、よくできた作文ね。あたし『青酸ニトリール』なんて知らないわよ」

池谷「往生際の悪いババアだ」

小泉「観念しろ。毒物は特定されたんだ」

美知子「特定？一体その毒は、何処にあるのよ」

小泉「徹底的に家宅捜査して、見つけてやる」

美知子「そんな都合のいい毒が、世の中にあるのかしら？」

池谷「存在を河合が告白しているんだ」

美知子「秀ちゃんが言っていたわ。日本軍が、中国人捕虜を使った人体実験で開発した毒があるって」

小泉「それが『青酸ニトリール』だ」

美知子「ホントかな？（池谷を見て）ホントかな？本当に日本軍は、中国でそんな残虐行為をしたのかな。あたしや信じられない」

池谷「何が言いたい」

美知子「その毒の存在を証明するためには、日本軍の残虐行為も実証しなければならないのよ」

池谷「・・・」

美知子「今の日本で、その事実を実証できるの」

池谷「・・・」

美知子「この世に存在しない毒。この世に存在しない毒で、人は殺せないわよね」

池谷「お前はその毒で、二人殺した。お前は人殺しだ。裁きを受けろ」

美知子「二人？中国では、何人殺したの。大勢の罪なき中国人を、生きたまま人体実験で殺した罪は、誰が裁くのよ！」

小泉「人殺しが偉そうに何を言うか」

美知子「大量殺人を裁けない国で、誰が私を裁けるというのよ！」
小泉「・・・」

池谷「まあ、正直言うと、状況証拠だけじゃ逮捕状も取れなかった・・・だけど、河合の遺書には、続きがある。聞きたいか」

美知子「秀ちゃんの遺書だ。聞いとくよ」

池谷が秀夫の遺書を見る。

池谷「可哀想な字だな、震えている・・・」

美知子「・・・」

池谷「(遺書を読む)『私は、美知子さんと共に、大きな罪を犯しました。その罪を背負って、その罪の償いの為に死んでいきます。最後に』」

○テーブルの前の秀夫

舞台上手のスポットライトの中、震えながら遺書を書いている秀夫が浮き上がる。

シューベルトの『セレナーデ』が流れる。

秀夫「最後に美知子さんに告白します。

私は、偶然あなたと出会った訳ではありません。

ずっと、あなたを狙っていたのです。

ずっと、あなたを恨んでいたのです。

いつか復讐しようと心に決めていました」

○治のマンション

美知子「復讐？秀ちゃんが何で？」

○テーブル前の秀夫

秀夫「復讐の為に、名前を変えて近づき、あなたのお金をすべて巻き上げようと思いました。でも最後にあなたに殺されることになったのです・・・これもあなたを裏切った私の運命です。（震える手を見ながら）ああ、もう手に力が入りません・・・死ぬ前に、これだけは分かってください。

本当は、ずっと、ずっと願っていたのです。

あなたと一緒に暮らすことを・・・

あなたに、優しく抱き締めてもらおうことを・・・

それも叶わぬ夢となりました・・・お母さん！！！！」

○治のマンション

美知子「お、お母さん！！！！」

○テーブル前の秀夫

秀夫「私は、あなたの息子です。あなたが刑務所に入っている時、捨てた息子です。もう・・・目が見えません・・・

もう一度、もう一度あなたの子守唄で眠りたかった・・・お母さん・・・お別れです。さ・よ・う・な・ら、お母さん、

お母さん、お母さ・・・」

秀夫、机にうつ伏して死ぬ。スポットライトの中の秀夫。

○治のマンション

美知子、声なき絶叫！（もがく様な）

美知子の体から色が抜けて行く。

池谷「河合は、あんたが刑務所に入る前に生んだ、最初の夫大宮明彦の子だよ。離婚して、すぐ夫は亡くなって、祖父に育てられたあんたの息子だ」

美知子がソファから崩れ落ち、スポットライトがあたる。

美知子「秀夫！！！（絶叫）全部、私が全部私が悪かったんだ」
美知子が苦しみながら、舞台上の秀夫に近づこうともがく。
ビュッ荒涼とした風の音。

美知子「ひ、秀ちゃん・・・秀ちゃん・・・」

美知子がもがきながら、秀夫に近づいて行く。
荒野には、二つの明かりが見える。

美知子「秀ちゃん・・・」

必死に秀夫に近づこうと、もがく美知子。

美知子は、もがき苦しむが、秀夫には近づけない。

ビュッ荒涼とした風の音。

スツと秀夫のスポットライトが消える。

哀しい美知子がひとり。寂しい風が吹く・・・

池谷と小泉が、美知子を見つめている。

池谷「（ゆっくりと美知子に近づき）罪を認めるんだね」

美知子「大罪だね・・・我が子を殺めるなんて・・・」

小泉「詳しくは、署で聞こう」

美知子「はい、すべてを告白します」

池谷「さあ、ばあさん行こうか」

池谷が美知子を立たせる。

美知子「（池谷に）刑事さん、一つお願いを聞いてもらっていいかい」

池谷「なんだ」

美知子「ワインが飲みたい」

小泉「ワイン？」

美知子「私の大切なワインを」

池谷「いいだろう。もう二度とワインは飲めないだろうから」

美知子「ありがとうよ、刑事さん」

CDで、シューベルトの『アヴェマリア』を掛ける。

美知子が、キッチンからワインボトルとグラスを持って来る。

美知子「このワインは、シャトーブリオンの70年ものだよ」

美知子、優雅にワインを飲む。

美知子「美味しい！こんな美味しいワインが最後のワインなんて、わたしや幸せだよ」

池谷「もういいか」

美知子「後生だよ。もう一口飲ませておくれよ」

美知子が、優雅にもう一口飲む。

美知子「(大きくため息をついて)何か・・・やっぱり・・・どこか・・・」
池谷「どうした」

美知子「不思議だね。秀ちゃんが近づいて来た時、可愛かったんだ。甘い言葉だと分かっているけど、あの子の言うことは、何でも聞いてやりたかったんだ」

池谷「やっぱり親子だ。どこか、通じ合っていたんだろ」

美知子「刑事さん、ありがとうよ」

美知子、そっとワインボトルを抱きしめる。

美知子「刑務所の4年間、ずっと息子をこの手に抱きしめる夢を見ていたのよ。夜、目を閉じると、赤ん坊の泣く声が、耳の奥で響いていたの・・・あたしや、ずっと平凡な幸せを夢見ていたのよ。でも出所すると、亭主の居所も分からなかった」

池谷「その時は、亭主は死んでいたんだ」

美知子「息子を捜すのを諦めてからは、ボウフラ人生さ」

池谷「ボウフラ人生？」

美知子「(頷いて)ボウフラは、人を刺すような蚊になるまでは、泥水のみのみ、浮き沈み」

池谷「泥水のみのみ浮き沈みか・・・俺にも一杯くれないか」

美知子がボトルをきつく抱きしめる。

美知子「こうしていると秀夫を抱きしめている気がするのよ」

美知子が、愛おしげにボトルを抱きしめる。

美知子「ごめんね、秀夫。ずっと、ずっと寂しい思いをさせて、

ごめんなさいね。30年間、お前を放っておいた母さんを許しておくれ・・・でも、やっつと、あんたの所へ行けるんだ

池谷「お前！毒を飲んだのか！」

美知子「これは私と秀夫のワイン。どっちみち死刑になるんだ。ちよつと早く息子の所に、行かせてもらおうよ」

小泉「吐かしましよう」

池谷「もう遅い。とにかく署に連絡して、応援を、いや、救急車を要請しろ」

小泉「了解しました」

小泉が、連絡の為に部屋を出る。

美知子「因果な毒だね。わたしやすぐ死にたいのに、なかなか死ねない毒なんて、本当に因果だね」

池谷「・・・(美知子を見ている)」

美知子「でも、もう少ししたら、息子に会えるんだ」

池谷「息子だけじゃないぞ。あんたが殺した人たちとも、感動のご対面だ！」

美知子「あら、それは大変だわ」

池谷「あんたでも恐ろしいのか」

美知子「ううん、あの人たちは、私を恨んでなんかない。私には分かるの」

池谷「・・・」

美知子「いっぺんに再会したら、数が多いから、会う順番が大変だと思ったのよ」

池谷「どこまでも食えねえ婆だな」

美知子「(透明な感じで)世間じゃ私のことを殺人鬼と呼ぶんでしようにね」

池谷「仕方ないだろ。人を大勢殺して、財産を奪ったんだ。強盗殺人だよ」

美知子「仕事だったのよ。ビジネス」

池谷「ビジネス？」

美知子「そう、こんな道を踏み外した身寄りのない年寄が、人並みの生活をするには、厳しい世の中なのよ」

池谷「そのために人殺しまでしなくていいだろう」

美知子「誰からも相手にされない、老い先短い老人を気持ちよくさせて、夢を見させて、そして、楽に往かせてあげたのよ。」

何が悪いの。これを仕事として何が悪いの。人間孤独に寂しく死んでいく方が、よっぽど可哀そうよ」

池谷「あんたと話していると、あんたが正しいような気になってくる。あんたは、生まれつきの詐欺師だな。でも、どんな理屈を付けても、人殺しは人殺しだ」

美知子「そうだね、人殺しは人殺しだ。許されないよね」

小泉が戻ってくる。

小泉「10分ぐらいで、到着します」

池谷「分かった」

美知子「・・・許される訳ないよね。最後は、自分の息子まで手にかけたんだ。天罰が当たったんだ。あたしや息子殺しの大罪も背負って、往かなきゃならない・・・」

池谷「それだけじゃない」

美知子「・・・」

池谷「あんたは自分が死ぬことで、もう一つ大きな罪を犯した」

美知子「大きな罪？」

池谷「ああ、あんたが死ねば、あんたの裁判はない。日本陸軍が開発したあの悪魔の毒が、また日本の闇の中に消えてしまう」
美知子「本当だね。あんたの言う通りだ。あたしや最後までバカな女だったよ。あんたに謝っても仕方ないけど、ごめんなさいね」

池谷「・・・」

美知子「ちよつと、休んでいいかな」

小泉「もうすぐ救急車が来る」

美知子「(首を横に振って)フツ、あたしの前には、もう死神が来ているよ」

小泉が一步下がる。

美知子「ねえ、秀ちゃん・・・」

美和子がまるで目の前の赤ん坊を抱きかかえるように見える。

池谷「・・・」

美知子「秀夫ちゃん、そろそろ、お寝んねしましょうね」

美知子が、ボトルを赤ちゃんのように抱き、ベッドに行く。

美知子がベッドに座り、子守唄を歌う。

美知子の歌う哀しい子守唄が流れる・・・

池谷と小泉が黙とうするように子守唄を聞いている・・・

遠くから、赤ちゃんの笑い声が聞こえる。

池谷 「ああやって、死んだ息子の魂に謝っているんだ・・・」

小泉 「涙が止まらないんです」

池谷 「母になれなかった女の、哀しい子守唄だ・・・」

子守唄を聴いている二人。

救急車のサイレンが近づいて来る。

終